
元バカとテストと召喚獣 + カオスなFクラス

ノッポガキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元バカとテストと召喚獣＋カオスなFクラス

【Nコード】

N3259Z

【作者名】

ノッポガキ

【あらすじ】

バカテスの再編です。

明久×瑞希なのでそれを許せる方のみお入りください。

基本、オリキャラは登場しないです。

玲が最初から登場してたり、Fクラスのメンバーが違っていたりとかオスなことになる予定です。

明久がもしもあの場面で瑞希の会っていたら的なストーリーー。

玲が教師だったり、Fクラスにあの人たちがいたり……そんな物語。

作者はハーレムが苦手です。あと、島田美波さんの出番が減るかも？

警告タグは念のため。

第一問 いままでのであらずじという名のプロローグ（前書き）

やってしまった……思いのほか筆が進むんだよ。

バカテストは要望があればやります。

ない場合は、気が向いたときだけたまーにやるかな？

第一問 いままでのあらすじという名のプロローグ

これは、僕が2年生に進級するまでの話だ。

ある日、葉月ちゃんって言う女の子が困っていて、それを助けるためにいろいろあったんだけど……それは割合。

問題なのは、葉月ちゃんが僕の頬にキスをしたあとのことです。

「明久くん……何してるんですかあ？」

「ひ、姫路さん……なんか笑顔が怖いよ!？」

そう、なぜか姫路さんがものすごく怖い笑顔で迫ってきたんだ。

「あれー？　なんで昔みたいに瑞希ちゃんって呼んでくれないんですかあ？」

「い、いやその……」

「な・ん・で・す・か？」

「……み、瑞希ちゃん」

「よろしい」

いったい、何が起こっているんだ？

「それで、さっきのは一体どういうことですか？」

「いや、僕にも何がなんだか……」

「どうということなんですか？」

「いや、だから……」

「どういうことなんですか？」

だからその笑顔はなんなの！？

「バカなおにちゃんとキレイなおねえちゃんは恋人なんですか？」

そこで、葉月ちゃんが爆弾発言。

「ふえええー！？」

「い、いや、それちがつ」

「……じー」

なんか、半開きの目で睨まれているんだけど！？

「葉月は……諦めません！」

そう言って葉月ちゃんはどこかへ行ってしまった……何を諦めないんだろう？

「それで、明久君……ちょっとO H A N A S H Iしましょうか」

「はい………」

そのあとの出来事は怖かったけど、姫路さ……瑞希ちゃんとまた話せるようになったのはうれしかった。

なぜかその日から毎日勉強と一緒にしているけど……なんでだろう？

そして、ある日の出来事。

それにしても、瑞希ちゃんは何で僕に勉強教えてくれるんだろう？

（明久君と一緒にのクラスになりたいからですよ）

なんだ？　なんか聞こえたような……

「瑞希ちゃん、何か言った？」

「いえ、何も言ってませんよ」

そのとき、インターホンがなる音がした。

「あ、はい！」

玄関を開けると……姉さんが立っていた……なぜかメイド服姿で。

「つて、姉さん！？」

「ただいま帰りましたアキ君」

「いや、なんでここにいるの!？」

「コチラで教師をすることになりました、今日から私もここで暮らします」

「……Really？」

「はい」

なんてこった……

「明久君、どうかしたんですか？」

あ……しまったあ!？

「アキ君？」

「姉さんこれは不順異性交遊じゃないんだ、一緒に勉強していただけなんだ、だから命だけは!！」

「……そうですか………一緒に勉強を」

マズイマズイ……

「あの……」

「どうも初めまして、吉井明久の姉の吉井玲といいます」

「あ、はい。姫路瑞希といいます」

普通に会話しているけど……大丈夫か？

「それじゃあアキ君、いつものようにお医者さんごっこを」

「してないからね!？」

「明久君とお医者さんごっこをするのは私です!！」

「瑞希ちゃんもなに言ってるの!？」

とんでもないことを口にしてるよ!？」

「そういえば、もうお昼ですね。アキ君、今日は姉さんが作ってあげましょう」

「いや、別にいい——って、関節を外さないでください!！」

なんでいきなり間接を外すの!？」

「なら、いつものお礼で私が作りますね」

「え!？」

マズイマズイ……この前瑞希ちゃんの料理を食べたけど………あれはヤバイ。

命的意味で。

「それなら、二人で作ってアキ君に食べ比べてもらおうというのはどうでしょうか？」

「ああ、それなら」

なんで、そんな最悪の方法で和解するの!？」

「じゃあ、まっけていてくださいね」

「アキ君、くれぐれもキッチンを覗かないでくださいね」

お、終わった………僕の命が……

結局、瑞希ちゃんや姉さんも自分が作った料理を食べてしまい、自分達の料理の危険性を理解は出来た……直るかどつかは別として。

頑丈な体で助かったとだけ言っておこう。
ギャグ補正な気もしないでもないが……

そして、ある日のこと……

「姉さんに無断で女の子を家に上げていたのですから罰を与えます」
といって……………なぜか、文月の女子用の制服を着させられた。

「なんで、女装させられてるの!？」

「かわいいですよアキ君」

「そうですよ明久君」

「なんで瑞希ちゃんもいるんだ!？」

「私が呼びました」

「姉さん!？」

いつのまに!？

「それでは、お買い物に行きましょうか」
「そうですね」

「あの……僕の服は？」

「今日は一日中その格好ですよ」

「そ、そんなぁ!？」

ちなみに、二人は今日こそリベンジだと食材を買おうとしていたため、全力で二人が変なものを買わないようにしないといけなかった。

おかげで、自分の格好のことが頭から抜けていた。

「!？ 見つけた……運命を……アキちゃんを!!」

途中、悪寒が走ったのは気のせいだと信じたい。

なんとか、危険なものを避けたけど……二人とも、食べられるものとそうでないものの区別ぐらいつけてよお願いだから。

「まったく、アキ君はそんな調子で今度の振り分けテストは大丈夫なんですか？」

「そうですね、頑張つて教えたんですからいい点とってくださいね」

うう、耳が痛い……

「大丈夫だよ、日本史と世界史なら瑞希ちゃんよりとれる自信はあるから！」

なんか、この二つだけは異常に成績が伸びた……理数系はそれほどでもないけど。

「まあ、今の成績なら……」

「そうですね、アキ君は頑張りました。ですが、本番で名前の欄にアレキサンドレス大王とか書きそうで心配です」

「いくらないんでもそんなミスはしないから!!」

大丈夫……のはずだ。

「そういえば、姉さんはどこの学校の教師になるの？」

「文月学園ですよ。いいませんでしたか？」

「初耳だよ!!!」

っていうか、なんでよりもよって!?

「アキ君が心配だったからに決まっているじゃないですか」

「そんな理由!？」

「あと、ついでに大学のほうに誘いが来ていたんですけどね」

「そっちを理由にするべきだよ?!」

この姉は勉強だけは出来るからな……そのぶん、一般常識に欠けるけど。

そして、振り分け試験当日。

瑞希ちゃんが熱を出してしまい、試験どころではなかった。

「はあ、はあ……退席、します」

「姫路、振り分け試験を途中退席すると0点だぞ」

「……そんなのおかしいじゃないですか!」

「吉井、貴様も無得点扱いにするぞ」

「ぐ、それでもいいです。行こう瑞希ちゃん」

「明久、君……」

僕は瑞希ちゃんを背負い、保健室へ向かった。

「ごめんなさい……私のせいで……明久君も頑張ったのに」

「いいんだよ、それに……」

「それに?」

「瑞希ちゃんとおなじクラスのほうがうれしいし」

「…… / / / / /」

「顔真つ赤だけど大丈夫?」

「平気です…… / / / / /」

そして、ここから先は僕の知る由もない話だ。

僕達が途中退席したのを見て、ある三人の女の子があることを思いついてしまった。

「途中退席…… Fクラス…… 雄二は絶対にFクラスに行く…… 名前を書かなければFクラス…… 雄二と一緒に……」

「Fクラスならアキちゃんがいる……無得点ならアキちゃんとおなじクラス」

「お姉さまはたぶんFクラス……豚野郎度もがいるのは嫌ですが、お姉さまとおなじクラスのためなら！」

僕とは全く関係のない人もいたけど、何か、とんでもない出来事が起こったのは間違いない。

「まったくアキ君は」

「ごめん、姉さん」

その日、姉さんに怒られています……まあ、仕方がないよね。無得点扱いで0点だし。

「ですが、姉さんは誇らしいです。そこで何もしないよりはずっとマシだと思っていますよ」

「姉さん………ありがとうございます」

そして、今日から2年生だ。

「吉井、遅刻だぞ」

「て——西村先生、おはようございます」

「今、鉄人と言おうとしなかったか？」
「気のせいですよ」

まったく、するどい。

「それより言うことがあるんじゃないか？」
「えっと……今日も肌が……じゃなくて遅刻してスイマセン」
「肌がなんだって？」
「いえ、なにも」

「まったく、ほれお前のクラスだ」

そう言つて、鉄人は封筒を手渡した。

「せっかく、成績も上げてきていたのに残念だったな」
「いえ、自分で選んだことですから」
「そうか……だが、俺はお前のしたことは人としてよかったと思うぞ」

「先生……ありがとうございます」
「ところで……お前の姉はいつもあんな感じなのか？」
「ええ……もう、諦めるしかないのかもしれないかもしれません」
「……………お前も苦労してるな」

封筒の中身は見ないでも分かっている……僕は封筒の中に書かれているクラスへ向かった。

僕の封筒の中にはこう書かれている。

『吉井明久 Fクラス』

こうして、僕らの最低クラスでの生活が始まったのだった。

第一問 いままでのあらすじという名のプロローグ（後書き）

次回はFクラス。

どんな力オス展開になっているのやら。

感想お待ちしております。

第二問 これがFクラスだ！（前書き）

うまく出来ているといいなあ……

とりあえず、自己紹介のくだりです。

第二問 これがFクラスだ！

Aクラスの前を通ると、とんでもない光景が広がっていた。

「個人液晶に、冷蔵庫にほかにも色々……やりすぎじゃないの？」

Aクラスの設備はとんでもないほどにいい設備だった。

『では皆さん、設備の不備はありませんか？』

学年主任の高橋先生がそう言っていた……っというか、不備を探すほうが難しいんじゃないかな？

『それではクラス代表の木下優子さん前へ』
『はい』

あれは秀吉のお姉さんかな？
本当にソックリなんだな

あれ？ てつきり去年の学年トップの霧島さんが代表だと思ったのに……いないみたいだ。
遅刻かな？

「まあ、関係ないか」

そういえば、霧島さんって同性愛者って噂があったよね。
まあ噂は所詮噂っていうけど……火のないところに煙は立たないっていうし。

「うーん……」

「どうかしたんですか明久君？」

「あれ？ 瑞希ちゃん？」

いつの間にか隣に瑞希ちゃんがいた。

「いや、なんでもないよ」

「そうですか」

「それより、なんでここに？」

「先ほどまで保健室にいたので」

「そうか……」

「ねえ、体のほうはもう平気？」

「はい、おかげさまですっかり大丈夫です！」

「よかった……」

「じゃあ、いこっか」

「はい！」

「アレ？ 迷ったのかな？」

「明久君……迷ってませよ」

「そつだよね……」

なんだこの廃屋は？

「これがFクラス……」

「あ、あははは……」

苦笑いするしかないか……

そして、瑞希ちゃんがFクラスの扉を開けた。

「おくれてすい「早く座れ蛆虫野郎……！？」ませ……ほええ？」

目の前のゴリラが飛んでもないことを言った。

「総員、狙え……」

「さて、何故出会って間もない奴らなのに連携がそんなに取れているんだ！？　っていうか、上履きをかまえるな……」

ゴリラ……いや、僕の悪友の雄二がなにかごちゃごちゃ言ってるけど……

「うるさい！！　瑞希ちゃんを泣かせた罪は重いぞ……」

「俺は明久に言ったんだ！！　それにお前はいつから姫路のことを名前で……姫路？」

なんかややこしいことを言われそうになったけど、雄二は瑞希ちゃんがFクラスにいることのほうが気になったらしい。

「実は、試験の日に熱が出て途中退席してしまって」

教室中からなるほどーと言った声が上がる。

『実は俺も熱（の問題）が出たせいで』

『ああ、科学は難しかったな』

『俺は妹が遊んでって言ってきたさ』

『黙れ一人っ子』

『黙れ！ ミサキちゃんは俺の心の中にいるんだ！』

『実は前の晩に彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとうよ異端者（笑）』

なんか、馬鹿ばかりだ……

そして、教室のドアが開き先生が入ってきた……って、まさか！？

「早く席についてください」

『巨乳美人教師キタアアアアアア！……！』

Fクラスの皆が何か言っていたけど気にならない……だって、

「姉さんがなぜここに！？」

「あ、玲さん！？」

あの姉さんがなんでFクラスに！？

「それは姉さんがFクラスの担任だからですよ」

普通、新米教師は担任なんか出来ないと思うんだけど……鉄人辺り

が妥当だと思っただのに。

「姉さんが志願しました……Fクラスは新任でもいいそうなので」
最低設備だからこそか……

『それより、アイツ……姉さんだとか何とか言っただけだ？』
『ああ、言っていたな……』
『異端者め……』

なんだろう……クラスの皆を敵に回した気がする。

「それより、早く席につけてください。さもないとアキ君、姉さんがアキ君に「いえ、席に着きますので勘弁してください」……アキ君は意地悪です」

キス魔に言われたくない！！

「あれ？ 席は決まっていらないの……しかも畳にちゃぶ台って」
「それがFクラスです」

マジかよ……

とりあえず、適当な場所に座る。

右隣には瑞希ちゃんが座った。
そして、左隣には、

「明久、おまえ姉貴がいたんだな」

そう、雄二^{ユウジ}がいた。

「おい、いま変なこといわなかったか？」

「気のせいだよ」

感が鋭いやつめ……

「っていつか、お前の姉ってどんな人なんだ？」

「……………」

「すまん、お前も苦労しているみたいだな」

気がついたら目から何か熱いものが……

「どうも皆さん。吉井玲といます。教師にはなつたばかりですが頑張りますのでよろしくお願いします。ちなみに、主に英語を担当する予定です」

とりあえず、姉さんの変人っぷりが出ないことを祈ろう……

「みなさんの設備に不備はありますか？」

『俺の座布団に綿があまり入っていません』

「我慢してください」

『窓ガラスが割れてます』

「今は我慢してください。あとでガムテープを申請しておきしょう」

『ちゃぶ台が壊れています』

「ボンドがあるので自分でなおしてください」

『彼女がいなくて心がさびしいです』

「諦めてください。そして、極力自分達で何とかするように」

本当にヒドイ設備だな……瑞希ちゃんは大丈夫かな？

っていうか、姉さんも終始笑顔で凄いな……

「それでは、廊下側の人からどうぞ」

姉さんがそういうと、最初の人が立ち上がる。
って、アレは……

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

僕の悪友……秀吉は親友かな？ まあとにかく、友達の一人、の木下秀吉。

見た目は美少女だけど……

「ちなみに、一つ言っておくとわしは男じゃからな」
『『ウソダアア！！？』』

そう、あれでも一応男……はじめてあつたときは分からなかった……
っていうか、初対面で分かる人はいるの？

「……………土屋……康太」

次の無口な奴も友達の一人。

ただ、ポケットに入っているものをどうにかして欲しい。

「……………趣味はとうさ……………なんでもありません」

一部で有名なんだけど……………まあそれは置いておこう。
気にしないほうがいいだろう。

「……からの帰国子女で日本語は苦手です。趣味は――」

今度は女の子の声だ。良かった、瑞希ちゃん以外の女の子も……帰国子女？

「――吉井明久を殴ることです」

「し、島田さん……」

「ハロハロッ」

島田美波さん……一応、友達だけど……なぜかいつも殴ってくる僕の天敵。

「……島田さん」

「なんですか先生？」

「………ニコッ」

「!？」

姉さんがものすごく怖い笑みを島田さんに向けた……とりあえず、殴られなくなりそうだな。

「姫路瑞希です。趣味は料理です。よろしくお願いします」

今度は姫路さんが自己紹介した……でも、その趣味はやめて欲しい。僕の命的な意味で。

そして、僕の番になる。

「どうも、吉井明久です。特技は料理でパエリアが好きです」

一応、無難な自己紹介をしておいた。

「以外だな明久、お前のことだから「ダーリン」とでもよんでく
さいっていうかと思ったのに」

「さすがにそれはないよ」

「……なんか、お前変だぞ？」

「どこが？」

「昔と比べて馬鹿じゃない」

「なんだと!？」

僕達が言い争いをはじめようとしたとき、教室のドアが開かれた。

そして、そこにいたのは……

「……おくれてすいません」

「ちよつと道がこんでいましたので」

「寝過ごしてスミマセン!」

「あはは、転入の説明とかあつて遅れましたー」

四人の女の子がいた。

そして、その中の一人……長い黒髪の人たまさか!?

「では、自己紹介をして下さい」

まずはショートカットの女の子が前に出た。

「ボクは工藤愛子つていいいます。本当はもう少し前に転入する予定だったのが遅れてしまい、Fクラスになりました。これからよろしくお願いします。ちなみに、得意科目は保健体育です……実技もね」
『『ウオオオオオオオ！！！！』』

なんか、変な特技が付け加えられたような……

次は、ドリルのような髪の子が入ってきたけど……島田さんが絶句しているけどどうしたんだろっ？

「清水美春といいいます……この教室の豚野郎どもに言うておきます」
豚野郎？

「美春と島田美波お姉さまの邪魔をする奴は容赦しませんのでそのつもりで」

お姉さま？　　なんだか島田さんが遠いところに……

「美春！　ウチのことは諦めてつて言つたでしょ！！」

「お姉さま！　美春は絶対に諦めません！！」

「島田さん……お姉さまつて」

「ち、違うのよ吉井！！」

「邪魔をする豚野郎は……」

「美春、これ以上ウチの迷惑になるようなことをするなら……これからは清水さんって呼ぶわよ」

「美春が間違っていました！！」

なんか、ツツコンじゃいけないんだろうな。

その次に、髪をお下げにした女の子が前に出た。
見た感じは普通の女の子だな。

「はじめまして、玉野美紀です……好きな人はアキちゃんです」

前言撤回。絶対に変な人だと思う。

なぜかって？ 彼女がアキちゃんって言った瞬間、僕の体にもものすごい悪寒が……

「あ、アキちゃ……吉井君……！」

「まって、僕はアキちゃんではない……！」

っていうか、僕のこと……？

「そうだよ、アキちゃんはこの子だよ……！」

そう言っただけで玉野さんが持っていた写真を皆に見せる……ってこれは……？

「なぜ、この写真を……？」

「このまえ偶然街で見かけて……」

写真を撮られていたとはうかつだった……

『どうする？ 異端者に入るのかこれは？』

『いや、アキちゃんならいいだろ』

『そうだな、アキちゃんならいいか』

『ああ、むしろアキちゃん最高だな』

バカしかないのか!?

あ、だからFクラスなのか……

「これは…… / / /」

「ふむ…… / / /」

あれ？ 瑞希ちゃんと姉さん？

「「いくらで焼き増しですか!?!」」

「ない言ってるの二人とも!?!」

「撮影に協力してくれるなら」

「玉野さん!?!」

「……俺にも一枚かませろ」

「ムツツリーニ!?!」

土屋康太こと、ムツツリーニ……彼の写真時術は学園一だ。

「なるほど、それなら良い写真が撮れそうですね」

「しまった!?! 声に出てたのか!?!」

墓穴を掘ってしまった……

そして、最後に長い黒髪の美少女……彼女も本来ここにいるはずのない人間。

「……霧島翔子です」

学年トップの霧島さんだった。

「しよ、翔子!？」

あれ？ 雄二？

「なんでお前がここにいるんだ!？」

「……雄二はFクラスに入ると思った。だから名前書かなかった」

え？ ということ？

「……文月に入ったのも雄二がここ来たから。雄二が高校に行かないなら私も行かない」

……つまり、雄二を追いかけていたってこと？

「おまえなあ……」

「……雄二、浮気したら殺す」

「お前と俺は付き合ってたない!!」

つまり、同性愛者の噂は……所詮噂だったということか……っていうか、一途だなあ……やっぱりむかいてきたな……

ただ、今分かっていることが唯一つ。

『異端者め……霧島さんと仲良くしゃがって……』

『殺してやる……』

『クフフフフ』

雄二の命が風前の灯だということだけだ。

ちなみに、僕は姉さんがいるからやたら滅多なことではできないけど。

「みなさん、落ち着いてくださいね」

そう言って姉さんが教卓を叩く……すると、

——ガラガラガラ——

そんな音と共に教卓が壊れ去った。

「あら？　急いで代えの教卓を持ってきましたので待っていてくださいね。あと、ついでにチヨークも取ってきます」

よ、予想以上にヒドイ設備だな。

「ねえ、雄二ちょっといいかな？」

「なんだ？」

「ここじゃ話しにくいから廊下で」

このとき、僕にはある決意があった。

そのためにはコイツを焚きつけるのが一番だろう。

「で、なんのようだ？」

「雄二でしょ、クラス代表」

「勘がいいな。その通りだ」

「ねえ雄二、試召戦争をやってみない？」

第二問 これがFクラスだ！（後書き）

アレンジアレンジ！

極力、オリジナルの展開になるようにします。

目標は面白おかしくブレイク。

第三問 勝てる理由（前書き）

筆が進むよゝ

バカテストはどうしよっか……

第三問 勝てる理由

僕は雄二に試召戦争をやらないか切り出した。

「なんだと？ いったい、何が目的だ？」

「えっと、僕の中で突然勉強が目覚めて」

「ウソだな」

「……ハッキリ言わないでよ」

「まったく、そういう所はやっぱり明久だな」

「オイコラ雄二、どういう意味だ」

「気にするな」

「まったく……」

「それより、姫路のためか？」

「……そうだよ」

「案外あっさり認めるな」

「まあ、瑞希ちゃんが途中退席したときは僕が運んだからね……直
接見てるからどうしても上位の設備が欲しいって思うんだよ」

「ん？ ってことはお前も無得点なのか？」

「そうだよ」

「……まあ、明久の一人や二人は戦力に支障が出ないだろうな」

「どういう意味だ」

「そのままの意味だ」

この野郎……

「それに、俺もやるつもりだったしな」

「雄二が？ 設備とかは興味無さそうなのに」

「まあ、そうなんだが……なーに、学力が全てじゃないことを証明
してみたくなっただけ」

「そうなの？　僕はてつきり霧島さんのためにかと思ったけど」

とりあえず、さっきの仕返しをしてやろう。

コイツのことだろうから詐欺師のように「なんの関係もないぞ」とかいいそうだな。

「そ、そんな、そんな、ことこと、ことねえYO！」

「あれ？　ラップ調！？　っていうかマジで!？」

や、やぶ蛇だったあ!？

とりあえず、雄二が落ち着いてから教室に戻るとすぐに姉さんもやってきて自己紹介が再開された。

「須川亮です。趣味は――」

そして、雄二の前の人の自己紹介が終わり、最後に雄二が前に出た。

「俺はこのクラスの代表の坂本雄二だ。みんなに、一つ聞きたい」

そう言って、雄二は視線をかえる。

傷んだ畳。壊れたちゃぶ台。割れた窓ガラス。その他色々……

「この設備に、不満はないか？」

『『『『大アリじゃあああああ!!!!!!』』』』

クラスの心が一つになった瞬間だった。

『いくら設備に差があるからってこれはひど過ぎだろ!?!』

『そうだが、Aクラスもおなじ学費だろ!?!』

『この設備に不満がある奴なんているわけねえ!?!!』

「そこでだ、俺達はこれからAクラス相手に試召戦争をやるつもりだ!?!」

・
・
・

『でも、勝てるのか?』

『いや、無理だろ……Fクラスだし』

『勉強できないからFだからなあ……』

『姫路さんや霧島さんさえいればあとはいらない』

『お姉さま愛しています』

さすがFクラス……消極的だ……っていうか、変なの混ざってなかった?

「いや、勝てる! これをそれから証明する」

そうやって雄二は秀吉のほうを見る。

「まず、木下秀吉。コイツの姉のことは知っているだろう」

『木下……木下優子の弟か!?!』

『そういえば弟は演劇部のホープだって聞いたことがあるぞ!』

あ、そういえば…… Aクラスの代表になってたな、秀吉のお姉さん。

「そして、土屋康太。彼はあの有名なムツツリーニだ!」

「…………… (ブンブン!)」

ムツツリーニ、それは男子には尊敬を。女子には畏怖をもって挙げられる名前。まあ、一部の女子は支持してるけど……

「ムツツリーニ……さっき姫路や翔子のスカートの中をのぞいていただろ」

「あ、あわっ!？」

「……雄二はもうちょっと心配してもいいと思う」

「…………… そんな事実は一切ない」

「ムツツリーニ……何色だった？」

「…………… 水色と白なんでもない」

「うん、ムツツリーニがHなのは知っていたから」

「…………… (ブンブン!!)」

『見る、あそこまで言うておいて否定するなんて』

『ああ、ムツツリの名に恥じない姿だな』

『へー土屋君がムツツリーニだったんだ』

士気が高まっていくFクラス。

「姫路や翔子のことは言わなくてもいいだろう」

「わ、私ですか!？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

「…………… 雄二、私は？」

「ま、まあ頑張れ」

「……分かった」

『そうだ、彼女達がいるんだ!』

『ああ、学年トップ2がいれば勝てる!』

『むしろ彼女達がいれば何処でもいい!』

『姫路さん愛しています!』

『霧島さん結婚してください!』

「……私には雄二がいるから無理」

『NOオオオオオ!』

「だから、お前とはただの幼馴染だろうが!」

「……大丈夫、お義母さんには認められているから」

「オフクロオオオ!」

なんか雄二も大変そうだな……って言うか霧島さんって愉快な人だったんだ……

そして、瑞希ちゃんにラブコールを送っている奴はダレだ!?

「ま、まあそれに……吉井明久だっている!」

——シーン——

『ダレだ? 吉井明久って?』

『吉井先生の弟だろ』

『ああ、さっきの異端者か……』

『いや……』

『『アキちゃんだ！！』』

「だからアキちゃんじゃないって！！！！」

想像以上のバカばかりだよ……

「教えてやろう、こいつの肩書きは「観察処分者」だ！！」

つて、雄二が僕のトップシークレットを！？

「坂本君……明久君をオチで使ったんですか？」

「ひ、姫路？」

「……ニコッ？」

だからその怖い微笑みはやめてったら！！

「い、いや……それでも利点がある。観察処分者の召喚獣は物理干涉ができ、教師の雑用として召喚獣を使うから操作技術が飛びぬけているんだ」

まあ、もつとも……フィードバックがあるからおいそれと召喚はできないけどね。

『でも、観察処分者って馬鹿の代名詞だろ』

『だよなあ』

「大丈夫だ、いてもいなくても「坂本君？」クラスの仲間だ、大切にしよう」

なんだ？ 瑞希ちゃんはさっきからどうしたんだ？

「とにかく……ウチのクラスは最強だ!!」

『『『ウオオオオオオ!!』『』『』』』

皆が手を上げて立ち上がった。

「お、おー」

「……おー」

瑞希ちゃんに霧島さんもやってる。

「よし、まずはDクラス戦に勝ってそれを証明してやる。明久、さつそく宣戦布告を」

「パス」

「なに!?!」

「いや、下位勢力の宣戦布告って使者が死者になるよね」

「なにメタ発現してるんだお前は!?!」

「それに無得点扱いだから少しでもいい点が取れるように勉強しておきたいし」

「『『『……はあ!?!』『』『』』』」

僕の友達四人がビックリした声を上げる。

「なに? どうしたの!?!」

「ありえぬのじゃ……明久の口から勉強などと!?!」

「秀吉、失礼なこと言ってるよね」

「ありえない……吉井が勉強なんて……天地がひっくり返ってもありえない!？」

「島田さん、僕のことを何だと思っているの？」

「……………カメラは何処？」

「ドッキリじゃないから!!」

「明久……つらいことがあるなら相談に乗るぞ」

「そういうわけでもないから!!」

まったく……僕をなんだと思ってるんだか。

「アキ君の去年までの成績を考えれば当然の反応です」

「姉さん……いつの間に僕の隣にいたのかとか色々聞きたいことがあるんだけど」

「気にしないでください」

「まあ、明久がやる気になっているなら……で、だれが宣戦布告に行くんだ？」

結局そうなるのか……女子には行かせられないしな……

「あ、ならボクがいつてくるよ」

「工藤さん？」

行ってくれるならうれしいけど……

「あれ？でも転入の時期が遅れたって」

「ああ、振り分け試験には間に合わなかったけどテストは受けてあるよ」

「あ、そうなんだ」

「まあ、女子だけじゃなんだ、ムッツリーニ一緒に行ってくれ」
「……………（コクリ）」

そして、二人は宣戦布告に行ってしまった。

「大丈夫かな？」

「まあ、平気じゃないか？ 工藤ってやつもムッツリーニと同類っぽいし」

「ああ、たしかに……………」

まあ、少し復習をしておくか……………

「本当に勉強してやがる……………」

「天変地異の前触れかのう？」

本当に僕のことを何だと思っているんだろう？

・ ・ ・

そして、ムッツリーニたちが帰ってきたけれど……………

「ムッツリーニ！？ どうしたのその血は！？」

「顔中が血だらけだぞ！？」

だれだ！？ ムツツリー二にこんなことをしたのは！？

「ごめーん、ちょっと遊びすぎたらムツツリー二君が鼻血を出して」

「くっくっく鼻血かよ！？」

やっぱり、ムツツリー二はムツツリー二なんだね……

「っていつか、工藤さんは何をやったの」

「ちょっと特技のパンチラを」

「……」

おかしい、それは特技に含めていいものじゃない。

「あれー？ ボクの特技が気になるのかなー？」

うん、気になるはなるけど……

「くくく……」

後ろから殺気が三つぐらい出ているのが気になる……

「なんなら確かめてみる？」

「え、遠慮しておきます」

僕も命が惜しい。

「で、宣戦布告は？」

「……………今日の午後からだ」

「なら、ミーティングも兼ねて屋上で昼飯を食べるぞ」

そう言いながら僕らは屋上へ上がっていく。

メンバーは僕・瑞希ちゃん・雄二・秀吉・ムッツリーニ・島田さん・霧島さん・工藤さん・清水さん・玉野さん・姉さん

って、

「なんで姉さんがいるのさ!？」

「あら、教師と生徒の親睦を深めるためですよ」

「ぐっ……………正論だから否定できない……………」

それにしても大所帯だな……………女子の比率が多いし。

今頃教室では残っている人たちが血の涙を流しているんだろうな……………

そして、屋上の扉を開ける。

「気持ちいですねー」

ムッツリーニ……………さっきから瑞希ちゃんのスカートの^{姉さん}中を覗こうとしてるけど先生の前だって分かっている？

「……………(サスサス)」

「ムッツリーニ、畳の跡なら消えているからね」

「……………ッ(ブンブン)」

「大丈夫、ムツツリー二がHなのはみんな知ってるから」
「……………違う」

「さて、まずは昼飯を食うか」

「そうだね」

「明久、たまにはちゃんとしたものを……………いや、今は一人暮らしじゃないからそんなこともないのか。さっきも料理が得意って言うていたが、本当か？」

「うん、今日も僕が作ってきてるしね」

姉さんは作れないし。

「まあ、アキ君の料理はおいしいですからね」

「先生のぶんも吉井が？」

「ええ」

「確かに明久君のお料理はおいしいですからね……………プライドがスタボロになるくらい」

なんか、瑞希ちゃんが暗いけどどうかしたのかな？

「吉井、ちよつと味見させて」

「いいけど……………」

「豚野郎の料理を食べるといいますか!？」

「やっぱり今日から清水さんって」

「いえ、美春はお姉さまの味方です」

清水さんとひと悶着あったけど島田さんは僕のお弁当のおかずを一つとって食べた。

「……………」

「あれ？ 島田さん？」

「お姉さまどうしたのですか？！ ハッ！？ まさか毒を！？」

「入れてないから！！ そこまで言うなら清水さんも食べてみればいいじゃないか！！」

「ふん、本来なら豚野郎の作った料理など食べませんが……………」

そっぴいながらも一口。

「…………ま、負けた……………」

清水さんはo r zの体勢になってしまった。

「そんなにうまいのか？」

「ワシも食べてみたいのう」

「……興味津々」

「ボクも食べてみたいなー」

「アキちゃんのお弁当アキちゃんのお弁当」

うん、なんか変なものいたけど結局皆でトレードして食べることに
なった。

さすがに瑞希ちゃんや姉さんレベルで下手な人はもういないみたい
だった。

・
・
・

「そういえば雄二、なんでDクラスとやるの？」

「ああ、この戦力ならEクラス相手なら負けないしな」

「でもFクラスだよ」

「明久、周りのメンバーを良く見てみる」

えーっと……

「美少女に雄二の婚約者にバカとムツツリに美少年、それから同性愛者とお姉さまと変な人と転校生、それから僕の姉がいるね」

「おいまして明久……いつから翔子は俺の婚約者になった」

「あ、ごめん」

「……そう、私は雄二の妻」

「待て翔子、俺達はまだ付き合ってすらいない」

「まだってことは、これから違うの？」

「そ、そんなことあるわけ無いだろうがぁー!!」

まったく、雄二は素直じゃない。

人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死ぬって言うし、僕は霧島さんを応援しよう。

「っていうか、お姉さまって何よ」

「お姉さまはお姉さまです!!」

「美春、アンタのせいで吉井に変な誤解を」

「お姉さまに害虫がつかなくて美春は安心です!」

向こうでは二人がコントみたいなことをやっている。

「よかった……明久はワシを男としてみておるのじゃな」

「まあ、あの姉さんと暮らしているうちにもっとしっかりしようっ

て思っていたらいつの間にかね」

「何処の家も姉で苦勞するのが弟なんじゃろつな」

「ああ……それで親近感が」

秀吉も苦勞してるんだな……

「そういえば秀吉のお姉さんクラス代表だったよ」

「そうじゃったのか？」

「あれ？ 知らなかったの？」

「うむ、そうだったことはあまり話さないのだな」

そういえば、ちょっとカオスになってきたかな……

そこで、雄二が締めるように次の言葉を言った。

「ま、まあとにかく……ウチのクラスは——最強だ」

こうして、僕たちの戦争が始まった。

第三問 勝てる理由（後書き）

人数多いな……明久視点だけじゃ回せそうにないかも。

ちなみに、ウチの明久君は周りの濃さにより少しだけしっかりしています。

そのためFFF団に所属しておらず、秀吉のこととも男だと認識しています。

第四問 対決Dクラス（前書き）

バカテストをやるときはまとめて出そうと思います。

それではどうぞ。

第四問 対決Dクラス

屋上でのミーティングからしばらく経ち、試召戦争が始まった。

ここでルールのおさらいをしておこう。

原則としてクラス対抗戦。

教師の立会いの下、各科目ごとのテストの点数に応じた強さを持つ召喚獣を召喚できる。

召喚獣の点数はそのまま召喚獣のゲームで言うところのHPや攻撃力にもなる。

そして、0点になった瞬間、その生徒は……

『戦死者は補習うううう！！！！』

補習担当の西村先生（通称鉄人。最近はおてんこさまでもいいかなと思ってる）によって補習室へさらわれる。

『趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎という立派な生徒にしてやるから早く来い！！』

『イヤダアアアアアアア！！！！？？』

先生……それって洗脳じゃ……

「アキ君、手が止まっていますよ」

「おっといけない」

ちなみに、僕は全科目が0点だったからテストを受けている。

試召戦争中に受けるテストのことを補給試験といい、僕が受けているのもそれである。

瑞希ちゃんも受けているけど……凄いスピードだ。

補給試験は召喚獣に止めを刺されない限りは何度でもつけることができる。

「ふう……今頃、戦場はどうなっているかな？」

・
・
・

〈島田美波・開始〉

まったく、吉井は鈍感だし美春はFクラスに入ってくるし……

「最近、不幸だわ」

「お姉さまは私が幸せにします!!」

「それが不幸だっていつてるの!!」

『いたぞ！ Fクラスだ!!』

そうこうしているうちに、Dクラスの人がきたみたい。

「美春、アンタはそっち側をお願い!!」

「お姉さまのためなら!!」

「「試験召喚！！」」
「「試験召喚！！」」

ウチたちが召喚獣を召喚するための言葉を叫ぶ。
前から現れるのは私たちの分身。
軍服を着、手には武器を持ったウチたちの召喚獣。

—— 古典 ——

Fクラス	島田美波	6点
Fクラス	清水美春	96点
Dクラス	マイケル	97点
Dクラス	釘宮聡史	102点

……しまったあああ！？

「おい、アイツ雑魚だぞ」
「H A H A H A！ おじょうちゃんはワイが倒したるよ」

あれ？ マイケルって奴、意外と日本語流暢だ！？

「お姉さまを雑魚呼ばわり……許すまじ！！！」
「っていうか、美春は補給試験受けていたの！？」

「お姉さまのために一瞬で終わらせました!!」

「いくらなんでも速すぎよ!?!」

「それでは、行きます!!」

「ウチの話を聞いて!!」

美春が特攻を仕掛けるが、釘宮つてやつに抑えられてしまう。
そして、その隙にウチがマイケルにやられた。

Fクラス 島田美波 0点 補習室に逝きな

なんか、このシステムむかつくわね……

「お姉さま!?!」

『スキあり!!』

「ああ!?!」

Fクラス 清水美春 0点

あれ? こんどは表示されないの!?!

『戦死者は補習ううううう!!!!』

「いやああああ!!?!」

「お姉さまとなら地獄の補習も天国です!!」

〵 島田美波・終了〵

吉井明久・再開

さてと……大体できたかな。

「採点お願いします」

『はい』

さてと、次のテストも受けておくか。

出来れば僕も戦場に行きたいけど、点数がないとすぐに戦死だしね。

『坂本！！ 船越先生を呼び出したってDクラスの連中が！！』

そこで須川君がやってきた。

どうやら、数学の船越先生を呼び出したらしい。

あの先生は色々と危ない話がある……単位を盾に交際を迫ったりとか。

『そうか、なら偽情報を流せ』

『どんな偽情報だ？』

『……そうだな……ニヤリ』

そこで雄二は僕のほうを見て嫌な笑みを浮かべた……まさか僕を売るつもりか！？

『坂本君、人をだますのは感心しませんね。霧島さん、少しいいですか？』

『……分かりました』

『まってくれ翔子！！ 俺が悪かった！！』

あ、そういえば霧島さんたちもいたんだっ……

『……雄二、ここは私に任せて』

『テストは大丈夫なのか？』

『……雄二のためなら朝飯前』

まったく、うらやましい奴だ。

そして、そのまま霧島さんは戦場へと行った。
そのあと、

『なぜ霧島さんが！？』

『なんでFクラスなの！？』

『勝てるわけじゃないか！？』

とか聞こえてきた……まあ、実質的な学年一位だしね。

っていうか、力技で押し切ったのか……

「さて、次は僕の得意な世界史をやるのかな」

・ ・ ・

（木下秀吉・開始）

あ、ありのままに今起こったことを話すのじゃ。

まず、数学の船越教諭が来たと思ったら、Fクラスのほうから霧島

がやってきてDクラスをなぎ倒し始めたのじゃ……まさか、力わざとは……

「た、助かったのじゃ」

「……雄二のため雄二のため雄二のため——」

……これは俗に言うヤンデレというやつなのかつ？

このような美人に愛されて雄二は幸せ者じゃな。

く木下秀吉・終了く

く吉井明久・再開く

「なんだか、秀吉にツツコミたくなってきた……」

「何を言っているんだよ雄二」

「いや、なんでもない。それよりも明久、お前テストは？」

「もう終わったよ」

「そうか、終わったのか……」

「雄二、諦めたわけじゃないからね」

「なんだと!？」

「意外そうな顔をされても困るよ!!!」

「私も終わりました!!!」

「ボクはもう少し——」

瑞希ちゃんはテストを受け終わり、工藤さんはもう少しかかるみたいだ。

「そうか、工藤はそのまま受けていてくれ。俺と明久に姫路、それからその他でDクラスの本陣へと向かう」

どうやらそろそろ仕掛けるようだ。

僕達が教室を出て、Dクラスへと向かうと、陰に隠れていた敵が現れた。

どうやら、代表が出てくるのを待ち伏せていたようだ。

『Fクラス代表に風間響が仕掛けます試獣^{サモン}召喚！』

「Fクラス吉井明久が受けます！ 試獣^{サモン}召喚！！」

ちなみに、召喚を仕掛けられたら応じなくてはいけない。

もし逃げたら敵前逃亡で戦死扱いになる。

そして、誰かが代わりに受けることは可能。

ちなみに、姉さんについてきてもらってるので教科は英語。

——英語——

Dクラス 風間響 102点

Fクラス 吉井明久 200点

「ハアアアアア！？」

「うるさいな」

「明久、この点数はなんだ！？」

「去年から瑞希ちゃんや姉さんに教えてもらっていたんだよ……観
察処分者になったあとから」

「な、そうだったのか！？ ……そうか、あの後なら俺達が知らな
かったのもうなずけるが……この点数はいつたいなんだ！？」

まあ、去年の点数と比べると天と地ほどの差がある。

『な、なんでこんな奴がFクラスに！？』

驚いてるな

『ま、負けるかああ！！ 所詮はFクラスだ！！！！』

そして突っ込んできたが……

ヒョイ

『え？』

僕は観察処分者だ。だから召喚獣の扱いに関しては教師レベルだ。

「えい！」

ただ、僕の召喚獣の装備が決定された時点では改造ガクランに木刀
だったため、武器や防具は貧弱だ。

それでも、この操作技術と点数なら。

Dクラス 風間響 0点

Dクラスなんて敵じゃない。

「戦死者は補習うううううううう！！！！」

『イヤダアア！！！！』

あ、鉄人が来た。

「……吉井、頑張ったみたいだな」

「あ、ありがとうございます」

まさかほめられるとは思わなかった。

そして、鉄人はまた走り去っていった……教師が廊下を走っているのだろうか？

「なあ、明久……お前の姉はこの大学にいつていた？」

「たしか……アメリカのボストンにある学校だけど……それがどうしたの？」

「いや………なんでもない」

なんでそんなことを聞くんだろう？

「……（世界最高学府かよ……）」

なんか、雄二が遠い目をしてるな……

そして、Dクラスの前に来て見ると霧島さんが無双していた。

僕達必要なくね!?

「姫路、やってくれ」

「は、はいっ」

「鬼だ!?! 鬼がいる!?!」

これ以上の戦力投入はオーバーキルだよ!?

「アレ? 姫路さんどうしたの? Aクラスは自習中じゃなかった?」

「Fクラス、よし……姫路瑞希がDクラス代表に勝負を申し込みます!」

「は、はあ」

あれ? 姫路さん、なにか変なこと言いかけなかった?

「^{サモン}試獣召喚!」

「さ、^{サモン}試獣召喚」

——現代国語——

Fクラス	姫路瑞希	339点
Dクラス	平賀源二	129点

うわあああ……圧倒的。

「じ、ごめんなさい!」

「え、えええ！？」

こうして、僕達はDクラスに勝利した。

第四問 対決Dクラス（後書き）

安心の明久微改造（笑）

魔改造ではない。霧島とかに比べたら低いだろ。

だから微改造……微妙に改造……ズべったか。

明久が腕輪を使うとどんな特殊能力になるんだろう？
個人的には、物理干渉があるから使えない気がする。

あ、学園長の策略で発動キーワードを教えないとかいいかも。

一応、意見募集。

第五問 あの花のもつ手紙（前書き）

まさか、この部分だけで一話分かけるとは……

そのシリーズの目安は一話5000文字程度。

あのお話をギャグを交えたシリアス風味でおこないます。

第五問 あの花娘のもつ手紙

「さあ、戦後対談といこうか」

雄二がDクラスの代表の平賀君に話しかけている。

Dクラスは意気消沈してるけど……無理もないか。
Fクラスに負けたんだし。

「設備交換は明日の朝でいいか？」

平賀君が聞いてきた。

たぶん、今日はもう遅いし明日にしたいんだろう。
あとは気持ちの関係かな？

「いや、その必要はない」

『『『え？』』』

雄二がそんなことを言った瞬間、両クラスから声上がる。

「だから、設備交換はしない。FクラスはDクラスに和平交渉を申し込む」

『だ、代表！？何を言っているんだ！？』

『そうだぞ坂本！！』

「忘れたのか？俺達の目標はAクラスだ」

たしかに雄二はAクラスを目標にしてたけど……

「雄二、考え直さない？」

「いや、あくまでAクラスを狙う」

一体何を考えているんだ？

「そこでだ、Dクラスの諸君には設備交換の代わりにアレを壊してもらいたい」

雄二が指差したのはスペースの関係で置かれているBクラスのエアコンの室外機。

なんでBクラスの設備を？

「もちろん、和平交渉による終結だから実質には勝ち負けは発生しないがな」

「そのぐらいで設備を護れるならいいが……本当にいいのか？」

「Dクラスがこの話を飲むのならだ」

「……いいだろう、先生達には目をつけられるかもしれないがそのぐらいなら」

うーん……雄二のことだから何か考えがあるんだろうけど……

そして、和平交渉により戦争は終結した。

雄二は平賀君に室外機を壊すタイミングを指示していた。

・
・
・

「坂本雄二・開始」

さて、これでAクラスへの布石の一つが打ち終わった。

「……雄二」

「なんだ翔子？」

「……いったい、何のつもり？」

翔子は俺のことを見透かしたような目であえて聞いてきた……これでも幼馴染だ。俺の考えは読めるだろうが……

「あくまでAクラスを狙っているだけだが？ Dクラスの設備を奪わなかったのもモチベーションの維持のためだし」

うそは言っていない……うそはな。

「……雄二、私は諦めないから。絶対に」

「……」

「……雄二にも考えがあるように、私にも考えがある」

「……」

「……次のBクラス、気をつけたほうがいい」

「ああ、分かってる」

お互い、何を考えているかが分かる。

今は余計な言葉入らないだろう……俺達が話すべきときはAクラス戦だ。

だったら、次のBクラスのことを考えたほうがいい。

「あのー……坂本君、ちょっといいですか？」

「姫路か？ どうしたんだ？」

「……（ムスツ）」

「あ、霧島さん。大丈夫です、ちょっと坂本君に聞きたいことがあるだけです」

「……わかった」

「で、聞きたいことってなんだ？」

「あの……明久君が試召戦争をはじめたのはもしかして……」

なるほど、姫路もうすうすは気がついていたみたいだな……だが、俺は明久の幸せが大嫌いだ……だからここは、

「……雄二、瑞希の邪魔をしたら即結婚」

姫路のことを応援してやろうじゃないか。

っていうか、翔子……俺の考えを読むな。あと、なんで下の名前で呼んでいるんだ？

「……私は瑞希のことを応援することにした（私たちと似ている気がするし……）。だから瑞希も翔子って呼んでいい」

「あ、はいっ。それで、坂本君、さっきの話は」

「ああ……たぶんお前の考えている通りだぞ」

「はい……」

く坂本雄二・終了く

く吉井明久・再開く

さて、帰ろっかなと思ってしていると向こうで瑞希ちゃんと雄二、霧島さんが話しているのが見えた。

……まさか二股！？

なわけないか……でも、なんの話をしているんだろう？

『チャンスだぜ明久！今のうちに瑞希ちゃんのスカートめくつちまえよ！！』

これは僕の中の悪魔！？

……ちよつと疲れてるのかな？

『この場合は憑かれてるかもね』

なんだろう……天使のほうが嫌なことを言っている気が……

『まあ、捲っちゃいなよ……そしてあわよくば』

『やりすぎじゃね？』

『ちよ、悪魔と一緒にツツコまないでよ！？』

さーて、疲れているみたいだし、ゆっくり休むかー

・
・
・

帰り道、僕と雄二は家と同じ方向なのでいっしょに帰っている。

ちなみに、霧島さんも一緒にいるけど……聞くのは野暮つてもんだろつ。

「ねえ雄二、なんでBクラスなの？Aクラスが目標ならいらない

と思うんだけど」

「いや、Aクラス戦に必要なプロセスなんだ。いまのままじゃAクラスには勝てないからな」

「バツサリ言うね……」

「いくら姫路や翔子がいたってAクラス相手じゃ無理だ」

「Bクラスなら勝てるの？」

「ああ、そのためにDクラスとやったしな。あと、工藤や玉野の点数がどのくらいか知りたいしな」

「ふーん……あ」

そこで、僕はあることに気がついた。

「どうした明久？」

「教科書忘れてきちゃった」

やけに鞆が軽いなーとは思っていたけど。

「はあ、まったくしょうがない奴だな……待っていてやるからとって来い」

ん？ いつもなら先に帰るのに……さてはコイツ……

「霧島さん、雄二と二人っきりで帰るといいと思うよ」

「……ありがとう吉井はいい人」

「明久！？」

「じゃあねー」

「明久あああああ！？」

「……雄二とふたりつきり」

まったく、霧島さんみたいな美人と二人っきりの何処がいやなんだ

か……雄二は素直じゃない。

そして、僕は走って学園に戻り、教室を空ける。
っていうか、開けづらい……さすがFクラス。

「たっだいま」

ちよつとふざけてみたり。

「あ、明久君!？」

「瑞希ちゃん?!」

まだいたとは思わなかった……

「え、えとこれはその?! キャツ!？」

そのとき、なぜか慌てていた瑞希ちゃんが手に持っていた手紙のよ
うなものを落とした。

まるでラブレターみたいだな……

『明らかにラブレターだろ。ピンクの便箋に、封を止めるのはハ
ートのシール』

僕の中の悪魔、ウルサイ。

そして、手紙の一文が目に入る。

あなたのことが好きです

『これ以上ない物的証拠だな』

……反論できない。

「あ、あのこれは！」

「……変わった不幸の手紙だね」

『なんだその反応は！？』

なぜか、口から勝手に出てきて……

「あの、それはそれで淒く困るって言うか……これは不幸の手紙なんじゃ」

「ウソだ！！　なぜなら僕がこんなにも不幸になっているじゃないか！！」

あれ？　なんで僕は不幸な気持ちになっているんだろう？

「あ、明久君落ち着いてください！」

なんで、動揺してるんだっけ？

『まったく、鈍感男が』

さつきから悪魔がウルサイ……そういえば天使は何処に行った？

「ねえ、瑞希ちゃん？　その手紙はうちのクラスの奴？」

「は、はい」

瑞希ちゃんは顔を真っ赤にしながら答える。

もしかして、さっき話していた雄二？

いや、それはないだろう。瑞希ちゃんとはあまり接点がなかったし、雄二には霧島さんがいる。

さっき話していたときもそんな感じとはちょっと違った。

そういう感じだったら霧島さんが黙っていないと思う。

だとすると……美少年の秀吉かな？

秀吉なら一目ぼれとかもありうる。

「……ねえ、そいつの何処がいいの？ 確かに見た目はいいと思うけど」

「あ、いえ外見じゃなくて……もちろん外見も好きですけど……！」

「憎い！！ アイツが憎い！！」

「は、はあそうですか？」

「うん、僕は外見に自信がないし」

「そんなことないですよ！ 私の友達も結構騒いでいましたし」

「ほんと！？」

「はい、美少年の吉井君と坂本君と一緒に歩いているのを見ると絵になるよねって」

なぜだろう……ちょっと悪寒が……

「あと、どっちが受けなのかなとかも」

「今すぐその友達とは距離を置いたほうがいい。まだ瑞希ちゃんには早い、っていうか一生知らなくていい」

「は、はあ……」

「それにしても、外見よりも中身のほうが好きってこと？」

「はい」

確かに、秀吉は僕の知る中じゃ一番いい奴だと思う。

演劇バカなところもあるけど、欠点なんてほとんどないし、瑞希ちゃんとつりあうんだろうな……

「どんなところがいいの？」

「えっと、やさしいところとか……小学校の頃からやさしくて……私がこの思いに気がついたのは最近ですけど、いまでも、私の初恋の人なんです」

そうか……初恋……

あれ？ 秀吉って同じ学校だったっけ？

瑞希ちゃんとは小4からクラスは違ったけど同じ小学校と中学校だったし……

「ねえ、僕達が通っていた学校の人？」

「はい！」

あれ？ 秀吉じゃない……じゃあ、だれだ？

『ここまで気がついておいて分からないなんて……』

だから、さっきからウルサイぞ！！

「じゃ、じゃあれ……うまくいくといいね」

「はいっ！……」

瑞希ちゃんは本当にうれしそうに笑った。

その笑顔が誰かのために向けられたものだと思うと胸が痛くなる。

・
・
・

瑞希ちゃんが帰った後、僕はしばらく教室にいた。
ちよつと、帰る気がしなかった。

「アキ君、まだいたんですか？」

「あ、姉さん」

いつのまにか、姉さんが教室の前にいた。

「……アキ君、なにか悲しいことがあったんですか？」

「いやだなー、そんなことないよ」

「…………アキ君、アキ君は馬鹿です」

「なっ」

「馬鹿で鈍感です」

「ちよ、さつきからなんなの!？」

「でも、姉さんはアキ君のことが大好きです……一人の異性として」

「いい言葉だけど最後の一言で台無しだ!！」

「……ですが、それももう終わりにしないといけないのかも知れませんが、それでもう終わりにしないといけな

「え？」

そのときの姉さんの顔はとても悲しそうだった……でも、どこかうれしそうにも見える、そんな複雑な表情だった。

「……これからはアキちゃんを一人の同性として愛することにしませう」

「なおのこと嫌だ！……！」

やっぱり気のせいかな？

（……姉さんは、アキ君が成長してくれてうれしいですよ………さびしいことでもあります）

「姉さん、何か言った？」

「何でもありませんよ………姉さんも今日の仕事は終わりましたから帰りましょう」

「うん」

『不幸の手紙つていまどきあるのかな？』

って遅いよ僕の中の天使……！！

第五問 あの花のつ手紙（後書き）

ちよつとシリアスっぽくやってみた。最後はギャグでしめたけど。

悪魔&天使は明久が原作より頭良くなったため言動が変化しています。

っていうか、別人格っぽいですよ明久の中の悪魔と天使って。

第六問 恐怖のお弁当とBクラス戦開幕（前書き）

サクサク書けるのは何故？

第六問 恐怖のお弁当とBクラス戦開幕

翌日、僕はいつもどおりに学校に向かう。

「おはようー」

「お、ギリギリだぞ明久……って、どうしたんだその顔？」

「いや、ちよっと考え事してて」

寝不足ってほどじゃないけど……疲れが抜けていない。

「大丈夫なのか？ テストを受ける体力はあるか？」

「うん、それは大丈夫だと思う」

昨日のうちに点数はとれるだけとったし。

「ところで、Dクラスのことについてみんなはどうなの？」

「ああ、ちゃんと話しておいた……お前も聞いておくか？」

「いや、過ぎたことだしもういいよ」

「そうか……本当に大丈夫か？」

なんでこんなに心配するんだ？ めずらしいな。

「なんつーか……気力がないっていうか……」

「まあ、大丈夫だよ」

「一時間目は船越先生の数学のテストだぞ。補給どころかお前が船越先生に」

「大丈夫、おかげで目が覚めたよ」

あの先生の前でぼーっとするのはマズイ！

僕の貞操が！！

・ ・ ・

「うー疲れた……」

とりあえず、四教科終了……ただでさえテストは疲れるのに昨日の事が頭から離れない……

「うむ、たしかに疲れたのう」

秀吉が僕のほうにやってきた……秀吉、なんでポニーテールなの？

「……秀吉、ポニーテールとちょんまげを間違えていない？ それじゃあ男には見えないと思うよ」

「なんじゃと!？」

秀吉っていい意味で名前負けしていると思う。

だって、秀吉って名前なのにこの見た目……どうやってたらこんな風になるんだろう？

「……………いい写真が撮れた」

ムツリーニが写真を撮っている……やけに高そうなカメラ持ってきているけど……いったい、何処からそんな金を？

「よし、昼飯食いに行くぞ！　今日はラーメンとカレーとチャーハンとカツ丼にするか！」

雄二、食べすぎじゃないの？

「明久はどうだ？」

「僕は今日もお弁当だからパス」

「じゃあウチは」

「お姉さまは美春の作ってきたお弁当を食べてください！！」
「ちょ、いい加減にしなさい美春！！」

島田さんたちが今日もコントを繰り広げているな

「……雄二、私のお弁当を食べられないって言うの？」

「ちよつとまで翔子、なぜお前の作ってきた弁当を食べること前提なんだ？」

「……雄二にはお仕置が必要だと思う」

「だから俺はまだお前の彼氏ではない！！」

雄二……また「まだ」ってつけてるけど……気づいていないんだろ
うな……鈍感な奴め。

『『お前もだろ』』

って、僕の中の悪魔と天使、それはいったいどういう意味だコラ。

「アキちゃん、よかつたら私の作ってきた服を」

「まって玉野さん、なぜこの流れで服の話？　っていつか着ないからね女物なんて！！」

「ガーン！？」

「露骨にシヨックを受けてもダメ……！」

「なんか、騒がしくなってきたね……」

「………みえ、見え」

「……ピラッ」

「ブシャアアアアアアア……！！……？」

なんか、カオスなことになってきた………だけど、それをとめる声が聞こえてきた。

「あのー皆さん……よかつたら」

瑞希ちゃんが手に持った袋を見せてきた………見たところ重箱のようだ………まさか！？

「私、お弁当を」

ダッ（僕が逃げ出そうとする音）
ガシッ（僕を捕まえる雄二の手）

「なんで逃げ出そうとしているんだお前は」

「はなして……！」

「吉井、女の子の手料理から逃げちゃだめでしょ……！」

「いったいどうしたのじゃ？」

「………ありえない行動を」

皆はあの料理の恐ろしさを知らないからそんなことをいえるんだ………！！

「じゃあ、屋上で食うぞー」
「「「「おー!」「」「」」

待ってくれエエエエエ!!!!!

・
・
・

ヤバイヤバイヤバイヤバイ……

「どうしたのじゃ明久？」

「……………らしくない」

「姫路の手料理なんて泣いて喜びそうなものを」

たのむ、気がついてくれエエエ!!

「本当に貰っていいの？」

「ええ、みなさんどうぞ」

「……………おいしそう」

「きれいに並べてあるねー食べるのがもったいないよ」

「それじゃあ、一つ」

「あ、雄二待って!!」

雄二が瑞希ちゃんの作ってきたお弁当の中から揚げを一つ食べてしまった。

「うん、外はモチモチ中はサラサラ、甘すぎて渋すぎる味わいがつっても……ゴパアアツ!？」

「……雄二?!」

「だいじょうぶか雄二よ!？」

「…………脈はある」

よかった……まだ、大丈夫なレベルだ。

「いったいどうしたの!？」

「いまのから揚げを食べたから？」

「瑞希、このから揚げって……」

「えっと、栄養を重視してみたんですけど」

なるほど、前みたいに化学薬品を使ってないだけまだましかな……

「……瑞希ちゃん、もうちょっとレシピどおりに作ってみようよ」

「あうう」

「明久よ……姫路は料理が苦手じゃったのか？」

「うん……………これでも、前に比べたら食べれるものから作られているだけマシかな」

「ちよつとまつて、ついていけない」

「レシピぐらいちゃんと見てください!！」

「あううう……」

「ま、まあ次頑張ればいいよ!！」

「明久君…………」

「明久よ、姫路の料理の腕をしておるといふことは前にも食べたことがあるのかのう?」

「うん……前は調味料」化学薬品だったから大変だったよ」
「……よく、いきておるの」
「……姉さんも似たり寄ったりだったから」
「……苦勞、しておるのう」
「うん……」

その後、女性陣がなんとか料理の常識を叩き込んでくれたことで緩和されたと思う……っていうか、そうであって欲しい。

その後、耐性がある僕が瑞希ちゃんの料理を食べることにした。残すのはもったいないし、栄養があるのは間違いないしね。

……皆は「勇者だ！」とか言っていたけど大げさだなあ。

「いや、オヌシの味覚にツッコミたいのじゃが……」

「……色々な意味で凄い」

「今度はおいしいのを作ってきますから!!」

「……ウチも負けるわけにはいかないわね」

「……お姉さまのお弁当を食べるのは美春です!!」

「アキちゃんに似合いそうな服を……」

なんか、変なセリフが聞こえたような？

ちなみに、気絶した雄二は霧島さんに膝枕されていた。

ちよつとムカツク……

・

・

昼食を終え、次のBクラス戦について話し合う。

「で、なんでBクラスとやるの？」

「ああ、Bクラス使ってAクラスとの一騎討ちに持ち込むつもりだ」

なるほど……普通に戦ったらAクラスには負けるからね。

瑞希ちゃんや霧島さんがいるけど、同レベルの人はAクラスに10人くらいいる。

今のままじゃ勝ち目はないだろうからね。

「それに、Bクラスと設備交換をしたら向こうから攻めてくるだろうしな」

「なんで？」

「……Aクラスの代表になった優子はそういう性格」

「努力もなしにいい設備を手に入れられることが許せないって口らしい」

「なるほどね」

まあ、Fクラスにも努力している人はいるんだけど……瑞希ちゃんや秀吉に霧島さんぐらいからな！。

秀吉だけが純粹にFクラスの学力だし。

「だから、Bクラスを使って一騎討ちに持ち込むんだ」

「よく考えているのね」

「島田、人事みたいに言わないで自分も日本語を勉強したらどうだ？」

「な、何を言っているのよ!!」
「全科目で明久に負けていたぞ」
「な!?! ありえないわ!?!」
「俺もビツクリしたんだが……成績表を見たらすでにAクラスのレベルだった」
「……はあ!?!」

みんなビツクリしてるなあ……ちなみに、雄二の言う成績表つてのは、クラス代表に配られる自分のクラスの生徒の大まかな得点表。

「う、ウソ言わないでよ!!」
「本当だぞ……俺も目を疑った」
「いったい何があったのじゃ?」
「……カメラは?」
「ムツツリー二、そのボケは前にやったよ」

みんななかなか信じてくれなくて悲しかった……島田さんが凄い落ち込んでいたけどどうしたんだろう?

「まあ、根本的な部分は変わらないんだな」
「そうじゃのう」
「……鈍感」
「姫路さんと島田さんも苦労するねー」
「美春としては助かりますが」
「なんの話?」

「あまり気にしないほうが良いと思うぞ。ところで雄二よ、Aクラスが一騎討ちに応じてくれるじゃろうか?」

「……私や瑞希のことを警戒されると思う」

「そこはメンバーを5対5にすればいいと思うぞ。向こうが警戒しているのは姫路と翔子だ。さっきも言ったが、明久はAクラスのレベルだ。姫路と翔子、明久の3人が勝てばこっちの勝利だ。向こうは観察処分者の明久のことなんかこれっぽっちも警戒していないだろうしな」

「そっかー、確かに警戒なんかしないよねー」

「しかも召喚獣の操作は学年一、点数もAクラスレベル。学年主席レベルの相手じゃないと勝てないだろうな」

「すこしチートな気がするの」

「僕もそんな気がしてきた」

なんか、いいのかこれ？

「科目の選択権をどうするかも問題だが、Aクラスに選択権を三つ与えても勝てるはずだ」

「？ ということ？」

「ムツツリー二がいる」

「ああ……保健体育」

ムツツリー二は保健体育の成績が学年一だからね。

「で、Bクラス戦はどうするの？」

「細かいことは後で教える。まずは前線布告を明久」

「だから、パスするって」

「まだ最後まで言っていないだろうが」

「だからイヤだって」

「しょうがない、今日のテストが終わったら須川にでも逝ってもらうか」

雄二、字が違うよ……

ちなみに、須川君には「Bクラスはたくましい男が好きな奴が多い」といつて行かせたらしい。

雄二……君って奴は……でも、なんで霧島さんはこんな奴のことが好きなんだろう？

・
・
・

「さて皆、総合科目テストご苦労だった。この後はBクラスと試召戦争だが、殺る気は十分か？」

『ウオオオオオオオ！！！！』

「今回の作戦は敵を教室に押し込むことが重要だ。開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『ウウウオオオオ！！！！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希と霧島翔子に指揮をとってもらう。野郎共、きつちり死んで来い！！」

『ウオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！』

さすがに息が続かなかったのか息継ぎの音が聞こえた……でも、息継ぎがハモるって……凄いな……

さすが美少女二人。士気が最高潮だ。これなら渡り廊下戦は勝てるだろう。

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り響く。

Bクラス戦の開始だ!!!

「目指すはシステムデスクだ!!」
『オォー!!!』

まずは渡り廊下戦、Bクラスからも敵がやってきた。

『Bクラス田中がFクラスに勝負を申し込みます!!』
『Fクラス横溝が受けます!!』

見ると、ほかのところでも戦いが始まっていた。

——総合科目——

Bクラス平均 1800点 10人

Fクラス平均 700点 10人

うん、圧倒的差だ。

『Bクラス、ロベルトが勝負を申しこむっス』
「Fクラス吉井が受けます!!!」

どうやら僕のいたフィールドは数学。

Bクラスには文系が多いらしいから理数系の教師を連れてきたらしい。

ちなみに、僕は一応文系。

っていうか、ロベルト君って……なんで外国人？

——数学——

Bクラス 松本ロベルト 160点

Fクラス 吉井明久 204点

『え！？』

『はああ！！』

相手が驚いている隙に喉元に木刀を叩きつける。
召喚獣にも急所が存在する。

Bクラス 松本ロベルト 0点

Fクラス 吉井明久 203点

「戦死者は補習ううううう！！！！」

「補習はいやっスー！！！！」

ハーフの人だったのかな？

なんか、特徴のある喋りかただったな。

『Bクラス岩下と菊入が姫路さんに勝負を申し込みます!!』

向こうを見ると瑞希ちゃんが二人に勝負を申し込まれていた。

——数学——

Bクラス 岩下 & amp・菊入 189点 & amp・151点

Fクラス 姫路瑞希 412点

『な、400点こえ!?!』

『私たちが勝てるわけじゃない!!!』

「えっと、行きます!!」

瑞希ちゃんの召喚獣の腕についていた腕輪から熱線が放たれた。

『『キヤアアアア!?!』』

そして、Bクラスの二人の召喚獣は一瞬でやられてしまった。

召喚獣は400点を超えた科目で召喚されると特殊能力を持った腕輪を装備して現れる。

姫路さんの場合は「熱線」らしい。

「すみませんっ！ 勝負ですので」

「姫路サイコー!!」

「姫路さん愛しています!!」

信者急増……っていうか、だからラブコールはだれが!?

『Bクラス本——』

「ウルサイ!!」

——数学——

Bクラス ??? 戦死

Fクラス 吉井明久 203点

『一瞬!?!』

「あれ? いつの間に……」

なんだか、気がついたら戦っていたみたいだ。

Bクラスを見ると士気が下がっていた。

ここは何とかなるだろう。

「瑞希ちゃん、ここは下がって」

「あ、はい」

出鼻はくじいた。

後は結果を待つだけだ。

『中堅部隊と入れ替わりながら交代しろ！！ 戦死だけはするな！！』

よし、Bクラスが下がり始めた。
狙い通りだ！！！！

「明久、ワシらはFクラスに戻るぞ」

「どうしたの秀吉？」

「Bクラス代表じゃが……あの根本らしい」

「根本って、根本恭二？」

「うむ」

根本……色々と黒い噂が絶えない奴で、カンニングの常連、喧嘩には刃物装備、球技大会では相手チームに一服持ったなどなど。

「たしかに、それは気をつけたほうがいいね」

「雄二に何かあるとは思えんが、念には念を入れておきたいからの」

そして、僕達は教室へむかった。

第六問 恐怖のお弁当とBクラス戦開幕（後書き）

感想お待ちしております。

第七問 卑怯者に制裁を（前書き）

筆が進みすぎる。

やっぱりラブコメは楽しい。

第七問 卑怯者に制裁を

僕達が教室に戻ると……

「うわぁ……」

「これはヒドイのう」

「まさかここまで卑怯な奴だとは思わなかったよ」

教室の中のちゃぶ台やらシャーペン、消しゴムにいたるまでボロボロだった。

「これじゃあ補給がままならないよ」

「たしかにのう」

そこで雄二が戻ってきた。

「派手にやられてるな」

「雄二、何処に行っていたの？」

「なに、Bクラスとの協定を結びにな。向こうが結びたいって言うてきたんだ」

「結んだの？」

「ああ、今日の5時までには決着がつかなかったら勝負は明日に持ち越した。その間は試召戦争に関する一切の行為の禁止だ」

「それ、結んでよかったの？」

「姫路のことを考えると当然だが？」

「たしかにそうだけど」

そのとき、ムッツリーニがやってきた。

「どうした？」

「……………Cクラスで動きがある」

「Cクラス？」

「大方、漁夫の利を狙ってるんだろ」

「たしかにのう」

「ねえムツツリーニ、Cクラスの代表ってどんな人？」

「……………小山、バレー部のホープ」

ああ、あの人か……

「……………見た目はいいがヒステリック」

ムツツリーニ、相変わらずの情報通……………っていうか、プライバシーは大丈夫なのか？

「……………こ、これは!？」

そこでムツツリーニは手に持っていたメモ帳みたいなものを見て愕然としていた……………たぶん、あの中には色々なことが書いてあるんだろうな……………

「どうしたムツツリーニ？」

「……………小山は根本の彼女らしい」

「はあ!？」

「なんじゃと!？」

「なんかキナ臭くない？」

「ああ……………根本の野郎、何か企んでいると思ったら……………」

「どうする？」

「おそらく根本は5時になったらCクラスに行くだろうな。で、俺達がCクラスに協定を結びに行ったら協定違反だとか言って襲って

くるな」

そこで、時計を見ると、まだ1時間以上はあることが分かった……
作戦を考えよう。

「……そうだ、秀吉。お前に頼みがある」
「ワシかの？」

「ああ、お前にはこれを着てもらいたい」

雄二が取り出したのは……文月学園の制服……女子用の。

「雄二、何を考えているの？」

「ワシにこれを着させてどうするつもりじゃ？」

「……霧島にいつける」

「おい、変な勘違いをするな」

「だって」

「のう」

「まったく、秀吉は姉と瓜二つだからAクラスの使者だと間違えられる。これを着て挑発すればいい」

「じゃが、姉上はAクラスの代表なのじゃ」

「そうなのか?!」

「うむ」

「僕もこの目で見たから間違いないよ」

「ぐっ……護衛も付けずに代表自らつてのは怪しまれるな……」

「とりえず、戦線を見てくるね」

戦線に戻ると、こちらが押していた。

おそらく、モチベーションの差だろう。

「吉井！ 何処行っていたの！」

「豚野郎！！ 早く来なさい！！」

「吉井君、何かあったの？」

島田さん、清水さん、工藤さんが戦っていた。

——数学——

Fクラス 島田美波 180点

Fクラス 清水美春 100点

Fクラス 工藤愛子 230点

「あれ？ 工藤さんの点数」

「すごいよ、瑞希や霧島さんほどじゃないけど彼女もAクラス並みよ！」

「まあ、一番得意なのは保健体育なんだけどねー」

「そ、そうだったんだ」

これは意外だった。

「よし、Fクラス吉井明久がBクラスに勝負を申し込みます」

——数学——

『な、アイツもAクラスレベルだぞ!?』

『マジか!?』

「吉井!?! なによその点数は?!」

「へー、本当にAクラスぐらいの点数だね」

「ウチが吉井に負けるなんて……」

そのご、僕達は驚いている敵を倒しながら前線へと向かった。

「あれ? 瑞希ちゃん?」

ふと横を見ると、瑞希ちゃんが動けていないようだった。

「瑞希ちゃん、どうかしたの?」

「あ、明久君……えっと、なんでもないで、す」

どうしたんだ? なにかあったのか?

「あつ、っ」

瑞希ちゃんが無かを見つけた……僕もその方向も見ると……根本がいた。

手には昨日、瑞希ちゃんが持っていたピンク色の封筒があった。

「……なるほどね」

まったく、面白いことをしてくれるじゃないか……

「……瑞希、どうかしたの？」

「あ、翔子ちゃん……なんでもありません」

「……？ ……そう、そういうこと」

霧島さんも根本が持っている手紙を見たようだ。

「瑞希ちゃん、ちょっと気分が悪いみたいだから後ろに下がって
て」

「……ここは私が何とかするから」

「でも」

「大丈夫」

「……はい」

瑞希ちゃんは後ろへ下がっていった……僕は、はらわたが煮え
くり返る思いだった。

「吉井……」

「わかってる……ちょっと雄二に相談してくるよ」

「なら、それまでここは任せて」

「よろしくね……お礼に雄二を一日好きにしていよう」

「……ありがとう……でも、今日はいい……むかっているのは私
も同じだから」

「そうだね……」

そのまま僕はFクラスへ向かった。
途中、瑞希ちゃんがいなかったところを見ると、保健室にでもいったんだろう。

「雄二!!」

「どうした？　臆病風に吹かれたか？」

雄二がふざけたことを言っているけど時間が惜しい。

「雄二、ちょっと話がある」

「……真剣な話みたいだな」

「ああ。瑞希ちゃんを戦線から外してほしい」

「なっ」

「それと、明日やる予定の作戦を今日やろう」

「おい!!」

「……たのむ」

「明久!？」

「おぬし!？」

どうやら、秀吉もいたらしい。

二人とも驚いている……そりゃあ驚くだろう。僕が土下座しているんだから。

「なにかあったのか？」

「詳しくは聞かないで欲しい……そうだ、Bクラスに勝ったらさっき雄二が秀吉に渡そうとしたものを根本君に着させてやらない？」

「……お前はほかに目的があるんだろうが……のつた!!」

「おぬしがそこまで本気になるの……」

「だが明久、何か考えがあるのか？」

「うん……どっちのでもいいから歴史の先生を連れてきてほしい」

「歴史？」

「ああ」

・
・
・

雄二が日本史の先生を連れてきてくれた……そして、僕達は霧島さんのいるところまでやって来た。

幸い、今は古典の竹中先生だ。

「須川、あのネタを使ってくれ」

「おう」

須川君が竹中先生の後ろに移動し、耳元で、

『あの……ズラがずれてますよ』
とささやいた。

『ちょっと急用ができました!!』

そこで竹中先生はどこかへ行ってしまった。
これにより、古典のフィールドは消えた。

そして、僕達が連れてきた日本史の先生がフィールドを張る。

「サモン！！」
「サモン！！」

そこで僕は召喚をおこなう。

元々いた召喚獣もフィールドが消えたことにより召喚しなおした。

——日本史——

Fクラス一般兵 70点 5人

Bクラス一般兵 185点 10人

さすがに差はでかい……でも、

Fクラス 霧島翔子 389点

Fクラス 吉井明久 485点

「はああ！？」

Bクラスから驚きの声上がる。
それもそのはずだ。

400点越えなんて滅多にいない。

「なんでFクラスにあんな奴が！？」

『いったいどうなっているんだ!?!』

「霧島さん、雄二の護衛お願いね」

「……わかった」

「明久、大丈夫なのか?」

「うん、この程度なら大丈夫……それに——負けるわけにはいかないからね」

僕の召喚獣が敵に肉薄する。

服装は改造学ラン、武器は木刀と最弱レベル……

でも、この点数ならむしろ利点となる。

『な、すばやい!?!』

『いくら400点越えでもこのスピードは!?!』

そう、装備が軽いぶん僕の召喚獣はほかに比べて速い。

そして、もう一つ利点がある。

「はあああ!?!」

ガキンッ!!

『な、武器が折れた!?!』

相手の武器は200点以下の点数によって決定された硬さ。
対して、僕の召喚獣は400点を超えている……すると、どうなる

だろうか？

鉄以上の強度をもつ木刀ということになる。

そして、相手の武器は見た目通りの強度。サーベルのような細い武器なら簡単に折れる。

強度が強い武器でも必然的に重くなる。

だが、木刀は軽い……

そう、僕の召喚獣は防御が弱い代わりに、圧倒的にスピードと攻撃力が高い。

『な、戦死した！？』

『こつちも！？』

『なんであんなにコントロールがうまいんだ！？』

『は、速すぎる！？』

『腕輪を使っていないのに！？』

「まさに無双じゃのう」

「敵に回したくないな」

「……おなじクラスでよかった」

そして、僕達はBクラスの中に入った。

「な、なんだ！？」

「根本おおおおお！！！！」

「近衛部隊！！！！」

そこで近衛部隊がやってきてしまった。

数は10ぐらい……まだこんなにいたのか!?

「はっはは、はははは!!! 停戦協定も意味無かったな。姫路や霧島のほかにAクラス並みの成績が何人かいたみたいだが、この状況はお前等にとって不利だろうな……それにしても暑いな……」

たしかに、僕達は点数を消耗しているし、Bクラスの中には違う科目の先生がいた。

フィールドが切り替われば点数差は縮まってしまふ。

「俺達の勝ちだ!!!」

「……それはどうかな?」

「なに?」

みると、Bクラスの窓が開いていた……そう、実は雄二はDクラスに連絡して室外機を壊してもらっていた。

これが、僕達の作戦。止めを僕が刺せないのは残念だけど、ここは任せるしかない。

「じゃあ、あとは頼んだよムツツリー二と工藤さん」
「は?」

一つ、言っておこう。

教師達は科目によって特徴がある。

たとえば、文系は採点が遅い人が多い。

理数系は逆に速い。

選択問題の多さなども関係がある。現代文は選択問題が多いだろう。歴史は人によりけり。

では、保健体育は？

保健体育を受け持つ教師の特徴……それは……

ダンッ！！！！

「な、窓から！？」

圧倒的行動力！！！！

「大島先生、Fクラス工藤愛子と」

「……………土屋康太がBクラス代表に保健体育勝負を申し込む」
「キ、キサマラアア！？」

——保健体育——

Bクラス 根本恭二 203点

Fクラス 工藤愛子 430点

Fクラス 土屋康太 460点

ムツッリーニと工藤さんが根本の召喚獣を一閃し、FクラスはBクラスに勝利した。

ちなみに、工藤さんはスパッツを履いていたそうだ。
ムツツリーニが血の涙を流しそうだった……

・ ・ ・

「さて、負け犬代表」

「……」

「このまま設備交換といきたいところだが、俺達も鬼じゃない。お前達がこちらの言うことを聞けば、和平交渉ということにしよう」

「どんな条件だ？」

「それはお前だよ根本」

「お、俺!？」

「ああ、正直お前は去年から目障りだったからな」

わぁ……雄二が悪役だ……霧島さんはなんでこんな奴のことか？

昔は神童と呼ばれていたぐらいなのに……過去に何かあったのか？

「そこでだ、お前がコイツを着てAクラスに戦争の準備があると言ってくれば設備交換はなしだ」

雄二がとりだしたのはさっきの女子用の制服。

「だ、だれがそんなもの——ゴフツ!?!」

根本が反論しようとしたとき、Bクラスのダレかが根本を殴った。

『任せろ!?!』

『Bクラスの名にかけて着させてやる!?!』

『私たちの教室に比べたら安い……こんなクズと比べるほどじゃないわ!?!』

「お、おう……」

さすがの雄二もひいてるな………っていうか信用なさ過ぎるだろ根本君。

「ん、んん……」

まだ息があるみたいだな………オラツ!!

「ゴフツ!?!」

よし。

『じゃあ、私が着付けやってあげるよー』

「あ、可愛くしてあげてね」

『無理、土台が腐ってるから』

うわああああここまで言われるんだ……

「なら、私が可愛く着付けてあげる」

「玉野さん？」

「大丈夫、翔子ちゃんたちから話は聞いたから」

「どうやら、あの話を聞いたらしい。」

「大丈夫、言いふらしたりはしないよ」

「見ると、かなり怒っている様子だ……まあ、それだけのことをコイツはしたんだ。」

「じゃあ、撮影はボク達にまかせてねー」

「……………写真集を作ってやる」

「こうして、根本は連行されたのだった。」

「……………手紙は私が瑞希に返しておく」

「おねがいね霧島さん」

「……………コクッ」

「さて、Bクラスの諸君に告ぐ……………Cクラスの代表である小山は……………根本の彼女らしいぞ」

『『『ナニイイイイ！？』『』『』』

「そこで、少し話がある」

Bクラスにこの情報を流したのはある理由がある……………それは、Cクラスの身動きを取れなくするため。

あくまで「らしいぞ」と言ったため、真実かどうかばかりである。そのため、僕達がAクラスに勝利した後、Cクラスが僕達に戦いを挑めばBクラスの弔い合戦だと思われる。

だが、もしそうなら根本と小山が付き合っているのがばれる。

そこで、先ほどの女装写真集の話が生かされる……つまり、小山の彼は女装癖があるという話になってしまう。

仮にここで別れたとしても、噂は残る。尾ひれも付くだろう。

そのため、Cクラスは身動きが取れなくなる。

Eクラスはそもそも戦争には興味はなく、ほとんどが部活動を優先している人で構成されたクラス。

宣戦布告はないと考えていい。あつたとしても、単科目特化がいないため、僕達の敵ではない。

Dクラスは和平交渉をしてあるため、宣戦布告はしない。Bクラスも同様。

これにより、Aクラスとの勝負に勝った後も設備を護ることができるというわけだ。

あとはCクラスを警戒しておけばいいだろう。もしくは、Bクラスに戦ってもらえばいい。

仮にBクラスが負けてもCクラスの設備になるだけだから引き受けてくれると思う。

雄二も同じ考えのようで、そのことを大まかにBクラスに話した。

『『『その話乗った!!』』』

Bクラスはまとまりがいいようだ。
一人を除いて。

こうして、Bクラスとの戦争は終結した。

そして、根本は女の格好でAクラスへと向かって行った。
人の恋路を邪魔すると馬に蹴られるっていうけど、本当に罰が当た
るんだね。

でも、瑞希ちゃんはだれに手紙を渡すつもりだったのかな？

なんだか、昨日からその事ばかりが頭によぎる…… Aクラス戦も
近いし、それが終わってから考えよう。

それまではこの胸の痛みも考えないようにしよう。

・ ・ ・

〈 姫路瑞希・開始 〉

「……瑞希いる？」

「あ、翔子ちゃん」

「……これ」

「え、これって……」

「……吉井が頑張った」

「明久君が？」

「……うん」

「明久君……やっぱりそうです。明久君は昔から優しくて……でも、こんな迷惑ばかりかける私が明久君の傍になんて」

「……そんなことない」

「え？」

「……私も、昔雄二に迷惑をかけた」

「そうなんですか？」

「……そのせいで、雄二は勉強をしなくなった……でも、そのときのことがあるから私はいつまでも雄二のことが好き」

「翔子ちゃん……」

「……私が雄二のことを好きなのは変わらない。絶対に」

「……」

「……瑞希は？」

「え？」

「……瑞希は吉井のことをどう思ってるの？」

「ふええええ！？ あ、あのっ」

「……好きなんでしょ？」

「は、はい」

「……なら、諦めちゃダメ。自分が迷惑ばかりかけるなんて思っちゃダメ」

「……そうですね。諦めちゃだめですよね。」

「……それに、言葉で直接言ったほうが効果的」
「え！？」

「……吉井は鈍感だから行動に表さないと伝わらない……正直なだけ雄二よりまだいいけど」

確かに、坂本君は正直じゃないですね。

「じゃあ、翔子ちゃん」

「？」

「ちょっと、作戦があるんですがいいですか？」

「……なに？」

「次のAクラス戦で坂本君は絶対戦いますよね？」

「……代表が出ないのはマズイから絶対に出る」

「なら、坂本君が負けたらなんでも言うことを一つ聞いてもらって言うのはどうですか？」

「……なんという策士」

でも、私はどうしようか……どうやって、明久君にこの気持ち
を……

く 姫路瑞希・終了く

第七問 卑怯者に制裁を（後書き）

そんな悪巧み（笑）

うちの明久君は勉強したせいか、ちょっと鈍感が直っている。

そして、雄二の婿入りフラグww

さらに、姫路と霧島が早期に仲良くなったことによりどうなる！？

次回を待ての終わり方。

感想をお待ちしております。カオスは褒め言葉。

第八問 バカテスト集その1（前書き）

作ってみたよー。
自分なりにやってみた。

第八問 バカテスト集その1

―日本史―

1549年にキリスト教を日本へ伝来した人物を答えなさい。

吉井明久・姫路瑞希・霧島翔子・工藤愛子の答え
「フランシスコ・ザビエル」

教師のコメント
文句なしの回答です。

吉井君は成績が上がっているようですね。特に日本史と世界史の二つが。歴史が好きなんでしょうか？

坂本雄二・木下秀吉の答え
「ザビエル」

教師のコメント
さすがにFクラスでも知っていましたよね。

土屋康太の答え
「サキエル」

教師のコメント
それは何処の使徒ですか？
ちなみに、キリスト教の天使の名前ですので関連性はあるといえ

あります。

須川亮以下Fクラス

「河童」

教師のコメント

全国のザビエルヘアーに謝って下さい。

―現代文―

次の漢字の読みを送り仮名をつけて答えなさい。
『慮る』

姫路瑞希・霧島翔子の答え

「おもんばかる」

教師のコメント

正解です。

吉井明久・工藤愛子の答え

「おもんはかる」

教師のコメント

惜しいです。次は間違えないようにしましょう。

木下秀吉の答え

「りよる」

教師のコメント

何とか答えようという意味は伝わりました。たしかに「りよ」とも読みますが正しくは違います。

坂本雄二以下Fクラスの答え

「はいりよる」

教師のコメント

あなた達への配慮のしようがないです。

―地学―

大陸の下の地殻にある不連続面の正式名称を答えよ。

姫路瑞希・吉井明久・霧島翔子・工藤愛子の答え

「モホロビチッチ不連続面」

教師のコメント

正解です。吉井君は最近珍回答をしなくなってよかったです。

木下秀吉の答え

「モホ面」

教師のコメント

それは略称です。一応部分点をあげます。

玉野美紀の答え

「ホモ面」

教師のコメント

ホモづらってなんですか？ 今すぐその言葉を忘れてください。

島田美波・清水美春の答え

「ホモビッチ不連続面」

教師のコメント

今すぐ正式名称を覚えてください。絶対にその言葉を口にしないでください。

土屋康太の答え

「ビッチ……ブシャアアアアア!!」

教師のコメント

テスト用紙を鼻血で汚さないでください。

――現代文――

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- 『 1 ・得意なことでも失敗してしまう』
- 『 2 ・悪いことがあつた上に更に悪いことが起こるたえ』
- 『 3 ・値打ちの分らないものには何の役にも立たないこと』

姫路瑞希の答え

- 「 1 ・弘法も筆の誤り」
- 「 2 ・泣きつ面に蜂」
- 「 3 ・猫に小判」

吉井明久の答え

- 「 1 ・猿も木から落ちる」
- 「 2 ・踏んだり蹴ったり」
- 「 3 ・豚に真珠」

教師のコメント

正解です。ほかに色々あるので探してみると面白いかもしれません。

工藤愛子の答え

- 「 1 ・見せたがりの恥ずかしがり」

教師のコメント

なんですかそれは？

土屋康太の答え

「ザビエルの川流れ」

教師のコメント

日本史の先生が呼んでいましたよ？

―保健体育―

女性は「？」を迎えることで第二次性徴期に入り、特有の体つきになる。

「？」のなかに入る言葉を答えなさい。

吉井明久・姫路瑞希・木下秀吉の答え

「初経」

教師のコメント

正解です。

霧島翔子の答え

「雄二との……ポツ」

教師のコメント

それは坂本君と結婚した後におこなうものです。

坂本雄二のコメント

もっとツツコむべきことがあるだろ！？

玉野美紀の答え

「アキちゃんとの……ポツ」

清水美春の答え

「お姉さまとの……ジュール」

教師のコメント

アナタ達もですか……清水さん、テスト用紙がよだれで汚かったです。

島田美波のコメント

だからほかにツッコむべき所がありますよね!!?

土屋康太・工藤愛子の答え

「初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では
以下、長いので略」

教師からのコメント

詳しくすぎです。

― 地理 ―

日本人は人種的になんと呼ばれる人種か答えなさい。

吉井明久・姫路瑞希・霧島翔子・工藤愛子の答え
「モンゴロイド」

教師のコメント
正解です。

木下秀吉の答え
「黄色人種」

教師のコメント
これも正解の一つです。コチラのほうが有名ですね。

清水美春の答え
「黄色いサル」

教師のコメント
それは侮辱の言葉です。絶対に人に向かって言わないでください。

―家庭科―

料理のさしすせそを答えなさい。

吉井明久以下Fクラス男子の答え

「さ・砂糖

し・塩

す・お酢

せ・しょうゆ

そ・味噌

」

教師のコメント

正解です。Fクラスは家庭科が得意な人が多いみたいですね。まさか男子全員が正解するとは思いませんでした。

工藤愛子・島田美波の答え

「そ・ソース」

教師のコメント

実はこれも正解です。

玉野美紀・清水美春の答え

「そ・ソーダ」

教師のコメント

なんと、これも正解だったりします。

姫路瑞希の答え

「
」

教師のコメント

かすかにですが、酢酸、硝酸などの文字が見えるのですが……科学と間違えたのでしょうか？

吉井明久の心情

まだ間違えてるんだ……途中で気づいたことをほめるべきか、まだ間違えることを怒るべきか……

第八問 バカテスト集その1（後書き）

感想とか待ってるよ。

次回は原作どおりか？ それとも違う展開か？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3259z/>

元バカとテストと召喚獣 + カオスなFクラス

2011年12月17日13時46分発行